古事記解説書

古事記は日本最古の歴史書と言われます。７１２年、太朝臣安麻呂により編纂され、時の元明天皇に献上されたとされています。古事記は上巻・中巻・下巻から成る物語です。ここでは、上巻から初代神武天皇が即位する中巻の初めまでの概要を述べます。

初代神武天皇が即位したのは、西暦表記では紀元前６６０年となりますから、以下の物語は、時代区分としては、太古の昔から紀元前６６０年までのことです。

神道
SHINTOH

１．国生み

はるか遠い昔。

天地が初めて生まれた時のことです。

天にある高天原（タカマガハラ）という神聖な土地に、神々が生まれました。まだ、地上に生命はなく、そこは水に浮いた油のような頼りないありさまでした。神々は、話し合いによって、伊弉諾（イザナギ）と伊弉冉（イザナミ）に自分たちを代表して国土を作らせることを決めました。

イザナギとイザナミは、神々より天の沼矛（アメノヌボコ）を授けられました。天の沼矛とは、勾玉のついた巨大な矛のことです。

沼矛を地上に突き刺し、かき回すと、淤能碁呂島（オノゴロシマ）ができました。イザナギとイザナミはこの島に降り立ち、婚姻し、淡路島から秋津島（現在の本州に相当する）まで八つの島を生み出しました。

2．イザナミの死

　イザナギとイザナミはたくさんの神々を生み出しました。イザナミは火の神を生み出すときにひどい火傷を負い、お隠れになりました。

　イザナギは、イザナミが生き返ることを強く願い、神々の世界の掟を破って、地の底にある死者の住む黄泉国（ヨミノクニ）を訪れました。

　イザナミは、すでに黄泉国の食べ物を食べてしまったことで、この国の住人となっていました。しかし、イザナミは、イザナギに対して、何とかするから待っていてください、と言って、御殿の奥に入っていきます。

イザナミ

日本神話に登場する女神。イザナギの妻。イザナギトともに、日本国を形成する島々や多くの神々を生み出した。火の神を生み出す際に火傷を負い、お隠れになった。イザナギが、黄泉の国にイザナミを迎えに行った際には、変わり果てた姿となっていた。

イザナギ

日本神話に登場する男神。イザナミの夫。イザナミとともに、日本国土を形作る多数の子（島）を生み出した。生み出した神々の中には、石、木、海、水、風、山、火などの森羅万象の神が含まれる。アマテラス、ツクヨミ、スサノオの父神。初代神武天皇の７代祖先とされる。

　イザナギは、長い時間、待ちましたが、イザナミは姿を現しません。そこで、イザナギが御殿の扉を開けると、身体がどろどろに腐り、変わり果てた姿のイザナミがいるではありませんか。

　イザナギは恐ろしくなり、逃げ出しました。しかし、イザナミは、よくも恥をかかせてくれましたね、と言って、追いかけてきます。イザナギは追いつかれそうになりましたが、邪悪なものを退ける力を持つ桃の力を借りるなどして、地上への出口である黄泉比良坂（ヨモツヒラサカ）を登り切りました。

地上へ戻ったイザナギは、禊ぎ払いをして身体を清めるため、水の中に入りました。

イザナギが顔を洗うと、天照大神（アマテラスオオミカミ）、月読命（ツクヨミノミコト）、須佐ノ男命（スサノオノミコト）が生まれました。この三神を三貴子（ミハシラノトウトキコ）と言います。

イザナギは、太陽神であるアマテラスが自分の後継者にふさわしいと考えました。そこで、アマテラスに、高天原の神々を率いて、治めるよう命じました。また、イザナギは、ツクヨミには夜之食国（ヨルノオスクニ）を支配するように、スサノオには海原（ウナバラ）を治めるように命じました。

ツクヨミノミコト

イザナギより生まれた。月を神格化した、夜を統括する神。イザナギより夜の国を統治するよう命じられた。アマテラスの弟、スサノオの兄。

3．アマテラスとスサノオ

スサノオはイザナギの言いつけに従いませんでした。また、スサノオは、母神であるイザナミが恋しく泣いてばかりいました。

見かねたイザナギが、どこにでも行ってしまうがいい、と言うと、スサノオは、アマテラスに別れを告げてから好きなところへ行きます、と言いました。

アマテラスは、スサノオが高天原にやって来たのを見て、スサノオは高天原を奪いに来たのではないかと疑い、スサノオと戦うことになりましたが、後に、スサノオが高天原で暮らすことを許しました。

しかし、スサノオは高天原の掟に従いません。そのため、アマテラスのもとには、神々からたくさんの苦情の声が届くようになりました。そのたびにアマテラスはスサノオに悪意はないので許してほしい、と神々をなだめましたが、ついにスサノオの行いが原因で、機織女（ハタオリメ）が死んでしまうという出来事が起きてしまいました。

責任を感じたアマテラスは、天岩戸（アマノイワト）という暗い石室に入り、戸を閉めました。

すると、高天原も下界も真っ暗になってしまいました。これによって悪い神々がざわざわと騒ぎ出し、あちこちで災いが起きるようになりました。

スサノオノミコト

イザナギより生まれた。アマテラス、ツクヨミの弟。イザナギより海の国を治めるよう命じられるが、スサノオはこれに従わず、イザナギよりどこにでも行けと追放される。スサノオは天上界のアマテラスを訪ねたものの、乱暴狼藉が続き、アマテラスは責任を感じ、岩戸に身を隠す。その後、スサノオは、地上の出雲国に降り立った。そこで、ヤマタノオロチを退治する。その後、黄泉の国へ。子孫であるオオクニヌシが黄泉の国のスサノオを訪れた際には数々の試練を与え、これに耐えたオオクニヌシに「大国主」の名を与えた。

困った神々は対応を話し合い、一計を案じました。

神々は、楽器を鳴らして賑やかに御神楽（オカグラ）を始めました。そして、天宇受売命（アメノウズメノミコト）という美しい女神が激しく身体を揺らして踊りました。その踊りがたいそう面白く、楽しいので、八百万（ヤオヨロズ）の神々は転げ回って笑いました。

アマテラスオオミカミ

イザナギより生まれた。ツクヨミ、スサノオの姉。イザナギより天上界（高天の原）を治めるよう命じられた。その孫、ニニギに地上の国を治めさせた。ニニギの子孫が、初代天皇（神武天皇）であるため、皇統の始まりとされる。太陽の神。伊勢神宮に祀られている。伊勢神宮には三種の神器の一つ、八咫鏡（ヤタノカガミ）が奉納されているとされる。

岩戸の中のアマテラスは、外の様子が気になり、戸を開いたところ、隠れていた神がアマテラスを外へ引き出し、ようやく太陽が戻りました。

八百万の神々は、スサノオに身を清めるよう命じました。そして、神々は、もうこれ以上、スサノオを高天原に置くことはできないと言うのでした。

そのため、スサノオは地上に降りて、そこで暮らすことになりました。

アメノウズメ

天岩戸に身を隠したアマテラスに出てきてもらうため、神々の前で激しい踊りを披露。力強くエロティックな踊りで、八百万の神々を大笑いさせた。
これにより、アマテラスは天岩戸から出てきた。

４．スサノオの八岐大蛇（ヤマタノオロチ）退治

クシナダヒメ

出雲国で、ヤマタノオロチに生け贄にされそうになっていたところをスサノオに助けられた。スサノオにより櫛に姿を変えてもらい、スサノオの髪に差し込まれ、その状態でスサノオはヤマタノオロチと戦った。その後、クシナダヒメはスサノオの妻となったと考えられている。

スサノオは地上の出雲国（イズノモクニ、現在の島根県）に降り立ちました。

そこで、泣いている老夫婦とその娘・櫛名田比売（クシナダヒメ）に出会いました。

事情を聞くと、近くの山奥に八岐大蛇（ヤマタノオロチ）という化け物がいて、老夫婦の８人の娘のうち７人を食べてしまい、今夜、最後の一人であるクシナダヒメを食べに来るというではありませんか。

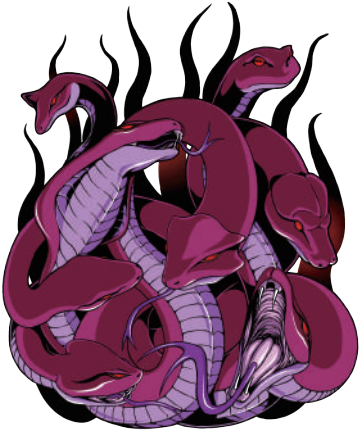
ヤマタノオロチは、頭が八つ、尾が八本の化け物で、ホオズキのような真っ赤な目をしているということでした。

スサノオは、ヤマタノオロチ退治を引き受け、村人たちに、米を八回発酵させ、八回漉した八塩折之酒（ヤシオリノサケ）には邪悪な力を鎮める力があるので用意するようお願いしました。

スサノオは、酒を飲み、眠り込んだヤマタノオロチを剣で切り刻みました。

ヤマタノオロチの尾からは立派な剣が出てきました。これが三種の神器の一つ、草薙剣（クサナギノツルギ）です。

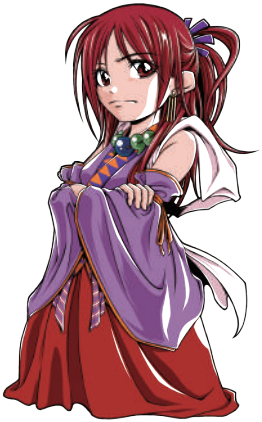
草薙剣は、熱田神宮に奉納されていると伝えられています。



ヤマタノオロチ

出雲国に住んでいた化け物。八つの頭、８本の尾、目はホオズキのように赤く、身体は八つの丘・八つの谷の間に伸びていた。スサノオの用意した酒を飲み、酔って眠り込んだところを、スサノオに退治された。その尾からは草薙剣が発見された。

5．大国主神（オオクニヌシノカミ）



スセリビメ

スサノオの娘。オオクニヌシカミの正妻。父・スサノオとともに根の国（黄泉の国）で暮らしていたが、根の国に逃れてきたオオクニヌシと出会い、結婚した。

スサノオは多くの子孫をもうけました。その中に大国主神（オオクニヌシノカミ）がいました。

オオクニヌシには多くの兄神がいました。

オオクニヌシは多くの試練を乗り越え、根の国に逃れた際に出会ったスセリビメ（須勢理毘売）と結婚しました。

また、地底の国にいたスサノオの教えも受けて、やがて兄神たちを従えて、出雲国（イズモノクニ）の主となりました。

その様子を見ていた高天原のアマテラスは、子神たちに「下に見える国（日本）はあなたが治めるべき国だ。あなたの役割を果たしなさい」と言いました。

子神が下を見てみると、乱暴な神々が争い合い、大騒ぎをしているではありませんか。

アマテラスは神々を地上に降らせましたが、みな、女性に心を奪われるなどして初心を忘れてしまいました。

そこでアマテラスは、高天原でも最も勇壮な神である建御雷神（タケミカズチノカミ）を降らせることにしました。

地上に降り立ったタケミカズチノカミは、オオクニヌシに国を譲るよう迫りました。

オオクニヌシは、自分の子神に回答させると答えました。オオクニヌシの子神の一人は国譲りに同意しました。もう一人は納得せず、タケミカズチノカミに戦いを挑みましたが、全くかないませんでした。

オオクニヌシノカミ

スサノオの子孫。スサノオの後、天下を経営し、地上国（出雲国と考えられる）を完成させる。天上界（高天の原）からの使いに国譲りを求められ、これに応じた。この際に天上界に要請し、出雲大社が建てられた。

オオクニヌシは、アマテラスの子孫に国を譲ることを決意しました。その際、オオクニヌシは、立派な神殿で自分のことを祀るように求め、遠い海の彼方に去って行きました。

そこで建てられた立派な神殿こそが、今に残る出雲大社です。

タケミカズチノカミは高天原に戻り、アマテラスに、地上が穏やかになりました、と報告しました。

タケミカヅチノカミ

天上界のアマテラスより、オオクニヌシノカミに国譲りを求めるよう、使いとして派遣された。出雲国の浜に降り立ったタケミカズチノオは、その武力を示すため、剣を並の上に逆さに突き立て、その切っ先の上にあぐらをかき、オオクニヌシに直談判を申し入れた。オオクニヌシの子（タケミナカタ）はこれに反対したものの、タケミカズチはこれを一蹴した。

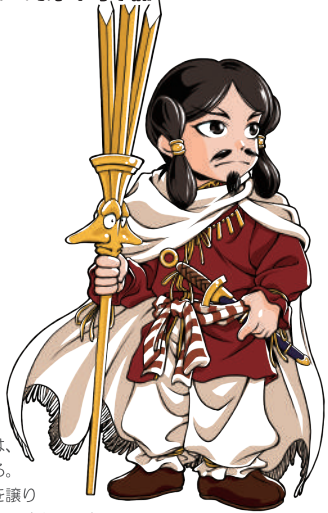
6．邇邇芸命（ニニギノミコト）・天孫降臨

アマテラスは、その子孫である邇邇芸命（ニニギノミコト）に対して、地上に降りて、そこを治めるように、と命じました。

ニニギノミコトは「稲を賑やかに育てる神」という意味の名前を持つ神です。

ニニギノミコトが地上に降りようとすると、天と地上を結ぶ道に輝くものが見えました。地上には、強い光を放つ神がいたのです。

光る神は、猿田比古神（サルタビコノカミ）と名乗り、日の御子（ヒノミコ）が地上に降りると聞いて道案内に来たのです、と言いました。



ニニギノミコト

アマテラスの子孫。ニニギという名は、稲が賑やかに実る、という意味である。オオクニヌシから地上の国の統治権を譲り受けたアマテラスは、ニニギノミコトに地上の国を治めるよう命じられ、地上の国に降り立った。これを天孫降臨という。その場所は宮崎県（日向の国）の高千穂峰とされる。

コノハナサクヤヒメ

ニニギノミコトの妻。ニニギは、コノハナサクヤヒメの姉（イワナガヒメ）とコノハナサクヤヒメの二人のいずれかと婚姻するよう求められたが、醜いイワナガヒメを送り返した。イワナガを妻にしていれば、その子孫は永遠の命を手に入れることができた、とされる。それをしなかったため、以後、ニニギの子孫である天皇の寿命も人並みになった。

アマテラスはこれを聞いて安心し、ニニギノミコトに対して、宝物を渡しました。

それは、天の岩屋の祭祀で用いられた八尺の勾玉（ヤサカノマガタマ）、八咫鏡（ヤタノカガミ）、そして、スサノオがヤマタノオロチの尾から見つけた草薙剣（クサナギノツルギ）でした。これらが三種の神器です。

現在に至るまで、皇室に受け継がれている、と伝えられています。

ニニギノミコトは、日向国（ヒュウガノクニ、現在の宮崎県）の高千穂の聖なる峰に降り立ちました。

その地で、ニニギノミコトはたいそう美しい娘、木花之佐久夜毘売（コノハナサクヤヒメ）に一目惚れし、結婚しました。

●三種の神器

ヤサカニノマガタマ

アマテラスが岩屋戸に身を隠した際に、玉祖命（タマノオヤノミコト）が作り、八咫鏡（ヤタノカガミ）ともに、榊の木に掛けられた。
「日（陽）」を表す八咫鏡に対して、「月（陰）」を表しているのではないか、との説がある。後に、アマテラスは地上へ降り立つニニギノミコトに対してこの勾玉を授けた。

ヤタノカガミ

アマテラスが岩屋戸に身を隠した際に、アマテラスの関心をひいて岩屋戸から誘い出すために石凝姥命（イシコリドメ）が作り出したとされる。
アマテラスは、外の様子が気になり岩戸を少し開け、鏡に映る自分の姿を目にし、引き寄せられたところを天手力男命（アメノタヂカラオ）によって岩屋戸の外へと引き出された。これにより、太陽が戻ったという。後に、アマテラスは地上へ降り立つニニギノミコトに対してこの鏡を授けた。

クサナギノツルギ

スサノオは、出雲国で、クシナダヒメを救うためにヤマタノオロチを退治した。オロチの尾から出てきたのが、草薙剣（クサナギノツルギ）である。
ヤマタノオロチの頭にはいつも叢雲がかかっていたことから、天叢雲剣（アメノムラクモノツルギ）とも呼ばれる。
草薙剣は、スサノオからアマテラスへ渡り、後に、アマテラスは地上へ降り立つニニギノミコトに対してこの剣を授けた。

７．伊波礼比古命（イワレビコノミコト）と神武東征

ニニギノミコトの子孫である日向国（ヒュウガノクニ、現在の宮崎県）の伊波礼比古命（イワレビコノミコト）は、兄と、どこの地であれば、安らかに天下を治めることができるだろうかと相談し、西の果てにいるよりも、都とする地を求めて東へ移るのがよいだろう、という話になりました。

イワレビコは軍勢を引き連れて、まず、筑紫国（ツクシノクニ、現在の北九州）を目指し、そこから安芸国（アキノクニ、現在の広島県）に進んで７年間滞在し、そこから備前国（ビゼンノクニ、現在の岡山県）へ進んで８年間滞在し、そこから船に乗って、摂津国（セッツノクニ、現在の大阪府北西部）の浪速（ナミハヤ）の海を横切り、白肩の津（現在の東大阪市）へ到着しました。

そこに大和国（ヤマトノクニ、現在の奈良県）の那賀須泥比古（ナガスネビコ）という強力な敵がいました。ナガスネビコとの戦いで、イワレビコは兄を亡くしてしまいました。

イワレビコは紀伊国（キイノクニ、現在の和歌山県）を通って、大和国（ヤマトノクニ、現在の奈良県）へたどり着きました。その地で、兄の敵・ナガスネビコの軍勢と決戦し、これを退けることができました。

その土地の人たちは、イワレビコが高天原に起源を有することを知って、イワレビコに従う態度を示し、大和国（ヤマトノクニ、現在の奈良県）は平穏になりました。

イワレビコは大和の橿原（カシハラ）に王宮を建てて天下を治めることになりました。

イワレビコは、後に神武天皇と呼ばれることになる初代の天皇であり、ここに天皇の歴史が始まった、と伝えられています。

参考文献：武光誠　著「歴史書古事記全訳」東京堂出版　初版２０１２年１１月２０日

この物語は、古事記の中巻へと続きます。
上巻の詳しい物語や、中巻以降の物語は図書館やインターネットなどで探して、古事記の奥深い世界を是非読んでみてください！

●中巻以降に登場する有名な人物

ミヤズヒメ

尾張国造の娘。ヤマトタケルの東征の際に、妻として娶られる。ヤマトタケルから草薙剣（クサナギノツルギ）を預けられた。そして、ヤマトタケルの死後、剣を熱田神宮に奉納した。

ヤマトタケルノミコト

第１２代景行天皇の皇子、第１４代仲哀天皇の父。ヤマトタケルは、兄を討伐したことで父に恐れられるようになり、九州の熊襲建兄弟を討伐するよう命じられ、その後、東方の蛮族を討伐するよう命じられた。叔母より、草薙剣を授けられる。
その帰り、伊吹山の神に素手で挑み、病となり、病没した。